

# 人権なら

2021年5月1日

第125号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

## 記念講演は藤原辰史さんに

### 9月開催の第12回「差別と人権」研究集会で

第12回「差別と人権」研究集会の9月4日開催に向けた準備が進んでいる。昨年はコロナ禍のため、本集会の中止を余儀なくされた。

昨年の企画では、世界中が今、目に見えないウイルスに振り回されている。腐敗政治、低迷経済に加え、この厄介なウイルスの感染拡大によって、私たちの日常生活が脅かされている。自粛要請で活動が制約され、人との関係が断ち切られている。事態が長引く中で、人々の不安は高まる。不満も高まる。雇い止めや、倒産などが相次ぎ、失業者も増えている。この事態で様々なことが見えてきた。グローバル化が進み、感染もたちまち世界に広がること。医療体制・制度の構築が必須なこと。弱者に被害が集中することなど、文明社会が分岐点にある、との時代認識を共有していた。

### パンデミックを生きる指針の提起を期待

この認識は今もほぼ変わらない。むしろ、コロナ禍は一層深刻化している。そこで、今年の研究集会の記念講演には、藤原辰史・京都大学人文科学研究所准教授(写真)に依頼した。

安倍政権の7年と、コロナ感染拡大を論じた藤原さんの昨年4月26日付朝日新聞への寄稿文「人文知を軽んじた失政」に驚き、その後、「パンデミックを生きる指針」などを拝読。ぜひ記念講演に、と考えてきた。

藤原さんには、講演を通してパンデミックを生きる指針を提起していただけることを期待している。



## 三宅町委託事業を開始

三宅町からの2021年度委託事業が始まった。今年度も「人権啓発相談事業」と「地域人権学習事業」の2事業を受託。人権意識と自尊感情を育むため、様々な人権に関する講座や研修、学習支援を行う。

事業では、「やさしさとぬくもり」ある地域社会の実現を目的に、各種団体との連携を図り、人権を尊重し合える街づくりを目指し、誰もが豊かに自分らしく生きたいとの願いを大切にする。



### 「人権啓発相談」「地域人権学習」事業を展開

「人権啓発相談事業」では、『つながりを求めて』第118号(写真)を発行。「つながり…」は年6回発行。各事業の紹介や活動の報告のほか、人権をテーマに情報発信する。また、「人権相談窓口」を開設。毎水曜日の11～16時に電話相談を行う。

「地域人権学習事業」では、中学生の学習支援と「居場所」としての「かいほう塾」の活動を行う(木曜日午後7時～8時30分)。また、「人権学習講座」を地域住民・在勤、町職員を対象に年5回実施する。初回は7月に開催する。

コロナ禍の1年が過ぎた。だが、この4月になって、大阪では過去最多、奈良県でも過去最多の感染者が出ている。4月25日には3度目の緊急事態宣言が出た。医療崩壊が叫ばれ、「トリアージ(命の選別)」まで行われている。この現実と向き合いながら、活動を進めていくことにする。

## コロナ下での差別を考える

### 無策な感染予防対策で感染者は増え続ける

新型コロナウイルスの感染が広がり始めて1年3カ月が経過した。収束のめどはまったく見えない。政府は先日、大阪など4都府県に緊急事態宣言を発令した。

4月29日現在、世界の感染者数は約1億5千万人、死者は約315万人だ。正にパンデミック。日本では、感染者数は約59万人、死者は約1万人を超えた。

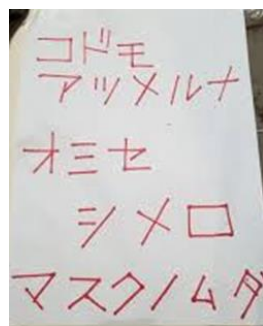
政府や自治体の感染予防対策は後手後手だ。無策過ぎて、批判の声が高まる。ワクチン接種状況は世界最悪。外出自粛を呼びかけながら、五輪開催は不動として聖火リレーを強行し、人流を巻き起こしている。

初期対応の検査すら実施しない。政府首脳や一部の知事らはテレビに出まくり、「やってる感」を演出するパフォーマンス。うんざりだ。医療体制は崩壊。命の選別が起きている。結果、死者が増えてきた。これまで医療予算や公立病院を削減してきた医療行政。そのつけが露になっている。ワクチン開発の遅れもそうだ。

この無策ぶりを国民の7割以上が感じている。ただただ自粛を求められ、収入も職も奪われる。先行き不安で息苦しさを抱え、イライラ感が募る。

### イライラのはけ口が弱者に向けられている

そうした不安やイライラのはけ口が社会的弱者に向けられている。コロナにまつわる差別、偏見が全国各地で起きている。医療従事者にまで及ぶ。「ウイルス」にではなく、「人」に苛立っている。正義を振りかざして行動する人もいる。いわゆる「自粛警察」だ。



政府や行政が要請する「自粛」という曖昧な基準を基に他人の行動を監視。他人の事情などは深く考えず、自身の主観で行動する。時には、普通の人が凶暴化してしまう。他人を傷つけ、差別迫害することで、自身の憂さ晴らしや、留飲を下げることにしている。

一方、行政の無策による感染拡大の責任を放棄し、個人の「私権制限」を求める動きも。注意が必要だ。

### 米国ではアジア系住民への暴力事件が頻発

米国では、アジア系住民に対する襲撃、暴力事件が頻発する。

ヘイトクライム(憎悪犯罪)だ。「国へ帰れ」の暴言や、歩行中に突如、暴



行を受ける。銃撃で6人が死亡したケースもあった。

なぜ、アジア系の人々がターゲットにされるのか。前大統領のトランプがコロナを「中国ウイルス」と言い続けた。感染防止策をとらずに、中国に責任転嫁。対立の構図を描き、政権批判の回避をねらった。

トランプはコロナを政治的に利用した。社会不安や経済への不満が高まると、副作用として差別や暴力が生まれがちだ。コロナ禍の不安や不満の矛先を中国に誘導。そうしたなか、根強く残る「黄禍論」がもたげられてきて、アジア系への暴力となっている。

### 誰もが差別し、差別される社会に生きている

長引くコロナ禍によって、差別、偏見が生まれやすい状況下にある。今や、コロナ感染の広がり、誰が感染してもおかしくない。差別する人たちも、自分自身がコロナに感染すれば、逆に差別されることになる。立場が変われば、自分自身に降りかかってくる。想像力を働かせてみれば、簡単に分かることだ。

自身が差別を受けることが嫌だと思えるなら、差別偏見に染まりきっている自身の浅はかさ、醜さ、卑劣さに気づくべきだ。冷静に考えれば、誰でも分かる。

私たちは、誰もが差別し、差別される社会に生きている。差別に敏感になり、マイノリティーが被っている不公正を見過ごしていることに気付くべきだ。差別をしていい理由は、どこにも存在しない。知性を働かせ、差別意識を克服し、差別言動をやめるようにしよう。

## 「先住民族アイヌは、いま」

### 10月30日まで県内8か所で巡回展を開催

巡回展「先住民族アイヌは、いま」が4月24日から10月30日まで県内8か所で開催されている。各会場では講演会などもある。主催するのは「先住民族アイヌのいまを考える会」。



そのオープニングセレモニーが4月24日に県人権センターであった＝写真。会場には、解説パネル44枚のほか、木綿衣やサケの皮で作られたくつ、クマの霊送りの儀礼「イオマンテ」で使用される弓や花矢などが展示された。

参加者には図録(協力・監修:多原良子・出原昌)が配布された。内容は①アイヌの起源と文化②近世のアイヌ民族と和人の戦い③日本近代化とアイヌ民族の誇り④アイヌ民族の生活⑤アイヌ民族の文化⑥アイヌ民族の神々⑦アイヌ民族の貧困と差別⑧アイヌ民族の先住権の今⑨先住民族アイヌの声を発信した人たち⑩アイヌ民族の民具と衣装。

### 2019年の施策推進法で先住民族と認定

浅川肇さんが主催者あいさつ。多くの個人と団体の協力で感謝のことばを述べるとともに、先住民族アイヌの声を発信した6人や、図録の監修に関わった多原良子さん、平取アイヌ遺骨を考える会代表の木村二三夫さんを紹介した。

また、奈良においては、アイヌの人々との交流が希薄なこともあって、基本的な認識が十分ではないと考えてきた。共に私たちが学ぶ機会として、この巡回展が開催されることを喜びたい、と語った。

このあと、来ひんあいさつに続き、図録の監修に関わった出原昌志さんが「パネル展示」を説明。15世紀以降、和人のアイヌモシリへの侵略・支配が強まり、近

代に入り、1899年には「旧土人保護法」が制定され、強制移住、土地の収奪や漁業・狩猟の禁止、独自の生活習慣を禁止されるなど、「同化政策」が強化され、差別と貧困を強いられた。そして、「アイヌ施策推進法」(2019年5月施行)で先住民族と認められたが、自治権や民族自決権などは盛り込まれていない、と説明した。

### 木村二三夫さんが「取り戻したいアイヌの歴史」

木村二三夫さんは講演に入る前、祈りを捧げた＝写真。「カムイに対してみなさまの健康をお祈りしました」「イヤイライケレ(ありがとう)」とあいさつ。「取り戻したいアイヌの歴史」をテーマに話をした。

木村さんは明治以降、150年に及ぶアイヌ民族がたどった、つらくて、悲しく、屈辱的な歴史をお話し、ご理解いただければ、と語り始めた。



まず、日本テレビが3月12日に放送した番組「スッキリ」の差別事件に触れ、憤りを語った。続いて自身が出演をするFMラジオ番組「木村二三夫の言いたい放題」で語った「アイヌたちがたどった悲しい歴史」の一部を紹介。かつての豊かな情景は和人の侵略を受け、一変したこと(明治維新とその後の廃藩置県以降、約400万人が移住してきた)。土地の没収や強制移住、漁業・狩猟、樹木伐採の禁止などがあつたと語り、「過酷な風景を想像してください」と述べた。

また、研究目的として持ち去られたアイヌの遺骨はその数が2000体におよぶ。この間の闘いで、平取には34体が返還されたが、いまだに謝罪はないとのことだった。木村さんの「やさしい語り口と、言葉の重み」が胸に残った。

### 5月29・30日に桜井市役所で開催

5月の巡回展「先住民族アイヌは、いま」は29・30日(土・日)10～16時、桜井市役所大会議室である。講演「アイヌモシリから北海道へ」は29日13時から。

# 映画「夜明け前のうた」鑑賞

## 誰もが口を閉ざし、闇に葬られた歴史を描く

映画『夜明け前のうた』—消された沖縄の障害者』を大阪・九条にある映画館「シネ・ヌーヴォ」で観た。

映画は、家族や親族からも、地域からも、「私宅監置」(隔離・監禁)を通じて「消されていく精神障害者」の実態を描く。監督の原義和さんは「誰もが口を閉ざしてきた事実であり、闇に葬られてきた歴史。結果、犠牲者たちは、まるでいなかった人のように消されてきた」と語る。



「私宅監置」制度は1900年制定の「精神病者監護法」に基づく措置として、精神障害者を小屋などに隔離した制度。日本では、1950年施行の「精神衛生法」で禁止された。だが、米軍統治下の沖縄では、「琉球精神衛生法」の下、1972年の沖縄「返還」まで容認された。

2018年12月の第24回ピープルファースト奈良大会の会場で写真展『闇から光へ』—知られざる沖縄戦後史』があった。写真展は、沖縄における精神障害

### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4月25日の衆参3補選・再選挙はいずれも野党候補が勝利した。菅政権発足後、初の国政選挙だった。前政権から続く収賄や買収、答弁の虚偽や拒否、縁故や忖度で歪んだ行政、辺野古や脱原発に対する民意無視、富裕層は優遇も社会的弱者は自助で放置、格差は拡大、コロナ対策は自粛の呼び掛けだけで先進国最低のレベル。一方で五輪ムードの盛り上げには余念がない。支離滅裂だ。民は怒っている。誰もこの民主政治に真逆の政権を信用も信頼もしない。地殻変動が起きている。総選挙は近い。政権交代が待たれる。野党は民の期待に応える体制づくりを急げ。

者の「私宅監置」制度の調査をもとに企画。「このつらい歴史が沖縄で広く共有され、当事者の尊厳回復と、誰もが自分らしく生きていける社会の実現につながることを切に祈る」とした。



写真を観て大きな衝撃を受けた。写真の前で動けなくなった。そんな胸の疼きを抱えてこの映画を観た。

映像は「歌を手がかりに」、奪われた顔や身体、その人を取り戻していく。色々と考え、静かに涙した。

\*\*\*\*\*

## 『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディみかこ著『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を読んだ。帯紙に「私的で普遍的な『親子の成長物語』」とある。



人種に対する差別や生活格差など、何気ない日常生活の中にちりばめられた差別や矛盾に日本人の母ちゃんと、イギリス人の父ちゃんと、その間に生まれた息子の日常会話を中心にして物語は進んでいく。

とりたてて飾られた言葉ではなく、自分の気持ちを素直に話し、差別や矛盾に向き合っていく。日常的に交わされる著者家族の会話は、気負うことなく読むことができた。本来、人権問題ってこんな風に何が正しいとかではなくて、自分がいる空間が楽しいものにするためのものではないのだから感じた。(よ)

著書は新潮社が出版。2019年6月刊。1485円。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター  
〒636-0223  
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1  
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833  
E-mail:info@nponara.or.jp  
http://www.nponara.or.jp/